

エコ・リサ研修見学会報告

2024年8月19日、17名で、加須の田んぼ発電と古民家や田んぼを保存する誠農社を見学しました。

加須農家の取り組み

～食料とエネルギーを市民が生産し、地域を豊かにするソーラーシェアリング～



田んぼに市民発電所

4年前、埼玉産直ネットワーク協会で1つ目の市民発電所を協会内に設置されました。今回見学させてもらったのは、2つ目の市民発電所。加須市砂原の松本慎一さんの田んぼに3年前に設置された田んぼ&ソーラーシェアリング。埼玉県初の市民によるソーラー・シェアリング（営農型太陽光発電）は、約100坪の田んぼのうち50坪に設置。ソーラーパネルの容量は、約80kw。年間発電量は、約10万kw時で、一般家庭約20軒分の電気が賄えます。

設置費用は1600万円。約1100万円を個人で出資し、約500万円を共鳴する市民や団体がなどから融資を受け、売電収入で返済しています。

100坪の田んぼは、日照、減農薬などの条件を整え、生育比較ができるようになっています。パネルは、用水をポンプアップしている陸田に設置されており、日照割合はパネルの下は、約7割。「理想は、8割程度の日照があるのがよいのかも。」と松本さんは話します。気温は日中、隣接する田んぼが40℃になっているのに比べ、平均7℃低く33℃程度、私たちが訪ねた8月には、10℃も差がでる日があるそうです。「近年、稲作にとっては、暑すぎる日が多く、稲が焼けるような状態になってしまう。」とのこと。用水は、蒸発や水温に配慮し夕方に水を流し込み、翌朝には水がたいてい無くなっているそうです。

道を挟んで向かいの田んぼは、高さが用水路より低いので水田です。除草剤を使わず無農薬栽培しているので、雑草がたくさん生えます。雑草は、早めに抜いてしまわないと、刈り取り時に大きく育った雑草が絡んでコンバインが使えなくなるので、雑草取りが重労働になっています。



高温障害を避けることができるので、米粒は大きく育つ

刈り取り作業は、「パネルの柱が邪魔になるので作業は大変になってしまう。」とのこと。両方の田んぼで同日、2日以内に実ったコシヒカリを収穫すると、パネルの下のは、青い米が混じるのに対し、パネルを設置していない方の米は干からびている状態。両方とも1等米ですが、東大の研究者に測定してもらうと、米一粒の大きさが、パネルの下のは7%ほど大きく育ち、価格は、パネル下の米は、3万円、設置していない方の米は1万7000円から8000円と倍近く異なるそうです。

農業を続けていくために、農家こそソーラーシェアリングを！

「10町（1町＝100m×100m）の農地の1割をソーラーシェアリングすれば、利益が出ます。」と松本さんはいいます。近年、農業関係資材は値上がりが続いていますが、ソーラーパネルは、10年前に比べて安くなっています。

米農家は、米価が下がったために、ほとんど収益がない状態に苦しんでいます。トラクター1台約700万円しますが、3分の1を補助金で賄っても、残りは借金をすることになります。国の一律の大規模農家支援策につられると、借金まみれになって農家を廃業するような大変な目に合う可能性があり、国の農業政策には問題が多くあります。現実には、今年の新米が収穫できるようになるまで、店頭では米が不足したままになっていますよ、と『改正農業基本法に4野党が怒り』の農民新聞の記事を資料としてお話をしました。

松本さんのソーラー発電は、売電収入が年間約200万円。その内100万円を借金の返済に充て、収益の中から10万円をハイチ共和国の食糧危機に苦しむ子供たちのために寄付を続けています。

「太陽から請求書は来ない」と元気に語る松本さんには、農家を続けていくための跡取りもいらっしゃるそうです。



ソーラーシェアリングを拡げるためには？

一時期、40円以上だった売電価格が、今は20円以下になっていますが、それ以上にパネル設置コストが下がっているため、半電・半農は有効です、と松本さんは語ります。

しかし、設置手続きの書類作成が膨大なこと、農地の一時転用の扱いのために3～4年に一度、農地法による手続きが必要で、外部に依頼すると費用がかかってしまうため、制度改正しなければ、なかなかソーラーシェアリングに取り組む農家は増えないだろうとのこと。

ソーラーパネルのもとで、収量が最高に収穫できた量の8割以上を確保できることが定められており、手続きの煩雑さと共に国の姿勢が変わらないとまだまだハードルが高く、参入を阻んでいる原因の一つとなっています。

石油・石炭・原発の燃料を海外から輸入するのに年間約 20 兆円を外国に支払う日本！

日本の農地の 1 %をソーラーシェアリングさせれば、需要を満たすことが可能になり、収益は地域で循環し、皆が豊かになります。原発 50 基分との試算ですから、農家が潤うことは、食とエネルギーの自給に大いに貢献できるはずだと実感できる見学会でした。

高齢化と跡取りの不足で、日本の農業の在り方に不安しかない私でしたが、ぽつぽつと近隣の農地でソーラーシェアリングに取り組む農家さんに出会うことができ、うれしかったのと同時に、再生可能エネルギーをすすめるためには、改正農業基本法について、もう少し学習が必要だなと反省した一日でした。

誠農社の取り組み

埼玉県加須市で「農ある暮らし」を提案している農家です。農薬や化学肥料を使用しない作物の栽培、農業活動を通しての食育や自然とふれあう場の提供、耕作放棄地や動物保護への取り組み、伝統や文化の継承を通じ、子供たちの未来へ豊かな田畑を繋いでいこうとされています。美味しいランチには、もぎたてイチジクが皮ごとカットされデザートとしてつけてくださいました。皆、お土産にと量り売りの行列に並びました。



(報告者 大前万寿美)

